

『伊勢物語』古注における紀有常の娘

著者	木戸 久二子
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	11
ページ	23-32
発行年	2000-06-25
URL	http://hdl.handle.net/10076/6556

『伊勢物語』古注における紀有常の娘

木戸久二子

一

『古今和歌集』巻第十五・恋五（七八四・七八五）に、次のような贈答歌がある。

業平朝臣きのありつねがむすめにすみけるを、うらむ
ることありてしばしのあひだひるはきてゆふさはか
へりのみしければよみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるも
のから（七八四）

返し

なりひらの朝臣

ゆきかへりそらにのみしてふる事はわがるる山の風はやみ
なり（七八五）（注1）

詞書に「業平朝臣きのありつねがむすめにすみける」と記されているところから、諸注、二人は夫婦関係にあったと見て差し支えないとする。「住む」には男女が夫婦として安定した関係を保つという意味があり、男が特定の女のもとに通い続けることを言った。

さて、この七八四番歌には作者名表記がない。『古今集』中、皇族以外の作者での同様の例は三六八番に見られるが、詞書の中で既に示された場合の作者名省略と考えられる。素直に解釈すれば、七八四番歌の作者は詞書に登場する「きのありつねがむすめ」になるのだが、「有常の娘の作と見るのが順当。ただし、有常が詠んだとも考えられる。」（新潮日本古典集成）（注2）というように、そうは考えない立場もある。「有常に対して恨み事があったのであろう。／有常が詠んでやったものか。」（新編日本古典文学全集）（注3）と、業平の舅にあたる紀有常本人が詠んだ歌と見るのである。『伊勢物語』における業平と有常の親密さが影響しているのであらう。しかし、もしも詠み手が有常ならば、当然作者名を「紀有常」と明記すると思われるので、紀有常の娘の歌と見ておく。

ここで注意したいのは、詞書の「うらむることありて」の部分である。主語は業平で、昼に来て夕方には帰ってしまうということから、その恨んだ原因を「女が他の男に好意を示したせいであらうか」（『古今和歌集全評釈』）（注4）と見るの

は自然の流れである。返歌の下句「わがゐる山の風はやみなり」については、「わたくしが共住みするそのお山の様子がきびしすぎるからなのです」（新日本古典文学大系）（注5）とするものが多いが、「女のもとに男のあまたかよへば」（『顯註密勸』）（注6）と解釈するものも古くからある。もちろん、後者の解には次章で見る『伊勢物語』第十九段の影響を考えなければなるまいが、紀有常の娘に関する唯一の資料である『古今集』歌の中に、そのような見方を生む素地が存在することを確認しておきたい。

二

『伊勢物語』第十九段は『古今集』の七八四・七八五番歌を用い、女を紀有常の娘だとは記さないで一章段を創作した。

むかし、男、宮仕へしける女の方に、御達なりける人をあひ知りたりける、ほどもなく離れにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男は、あるものかとも思ひたらず。女、

天雲のよそにも人のなりゆくかすがに目には見ゆるものから

とよめりければ、男、返し、

天雲のよそにのみしてふことはわがゐる山の風はやみなり

とよめりけるは、また男ある人となむいひける。（注7）
返歌の上二句を「ゆきかへりそらにのみして」から「天雲のよそにのみして」と改変し、贈答事情も全く別のものに設定している。

『伊勢物語』本文中、紀有常の娘の名は全く見えないが、父親の紀有常は第十六・三十八・八十二段の三つの章段に実名で登場する。

第十六段は、有常の妻が厄になるというので、業平を思わせる友達が経済的に余裕のない有常に代わって装束などを贈ってやるという話である。妻は登場するが、娘は出てこない。

第三十八段は、有常の家に昔男が訪ねて行ったが留守で、待っていた男と遅く帰宅した有常が、男女間の恋愛にも通じるような歌を詠み交わす章段である。恋にかけては並ぶ者などないはずの昔男が、同性の有常を待ち焦がれた様を恋の初体験として詠み、有常は有常でとぼけた歌を返している。二人の親密な交際を語る話になっている。

第八十二段は惟喬親王章段の一つとして著名なもので、業平を暗示する「右の馬の頭なりける人」や有常らが親王を囲み、交野の渚の院の桜の下で酒を飲みつつ、和歌を詠むという設定である。惟喬親王の母は紀名虎の娘静子、つまり有常の妹であり、有常は親王の伯父に当たる。

『尊卑分脈』（注8）では、有常の子に女子二名が載り、姉の方には「（在原）業平朝臣室／歌人古今作者」、妹の方には

ものかとも思われる。

三

「藤原敏行朝臣室」と記されている。業平の子としては棟梁・師尚・滋春の三人が載るが、棟梁と滋春の母は記されず、師尚の母には「斎宮恬子内親王」の名が見えるものの、「密通」とある。『伊勢物語』で業平と関係があったように描かれる高子についても、何ら記されてはいない。『尊卑分脈』で業平の「室」と記されるのは、有常の娘ただ一人なのである。

もっとも、『尊卑分脈』に見える女性には后などの特別な場合を除き、その信憑性には疑わしいものが少なくない。この場合も、かえって『古今集』や『伊勢物語』の記述を元に記された

まずは、古注の二大流派、『和歌知頭集』と冷泉家流古注が登場人物の女に紀有常の娘を当てている章段を見てみよう。次の表では、各章段のポイントになると思われる本文をあげ、『知頭集』は宮内庁書陵部本（注9）を用い、冷泉家流古注系統は六本（注10）を比較する。

* 冷泉家流古注六本で当てられている人物の略号

○…紀有常の娘 有…紀有常 小…小野小町 伊…伊勢 内…染殿内侍 四…四条后 二…二条后 五…五条后

章段	『和歌知頭集』	書	慶	注	十	増	奥	『伊勢物語』本文
一	春日のさとの女	○	○	○	○	○	○	初冠／奈良の京、春日の里／女はらから
一〇	いるまのこほりの女	○	○	○	○	○	○	武蔵の国／母なむ、あてなる人に心つたりける／父はなほ人にて、母なむ藤原なりける
一七	さくらに人まちえたる女	○	有	有	○	○	○	年ごろおとつれざりける人の、桜のさかりに見に來たりければ
一八	なま心ある女	小	小	○	小	小	小	なま心ある女
一九	ごたちなりける女	○	伊	伊	○	○	○	宮仕へしける女の方に、御達なりける人／また男ある人
二〇	やまとにある女	○	○	○	小	○	○	大和にある女／宮仕へする人

一一一	かしこく思ひかはす女	小	小	小	小	小	いでていにけり／おのが世々になりにければ、うとくなりにけり
一二二	はかなくてたへたる女	内	小	小	内	内	はかなくて絶えにける仲／いにしへよりもあはれにてなむ通ひける
一二三	(これはとをきむかしの事也 名なし)	○	○	○	○	○	ゐなかわたらひしける人の子ども／親のあはすれども聞かでなむありける／本意のごとくあひにけり／女、親なく頼りなくなる／行き通ふ所いできにけり／河内へも行かずなりにけり／大和人
一二四	にゐまくらする女	○	○	○	○	○	かたるなか／宮仕へ／三年来ざりければ／いとねむごろに言ひける人／男婦りにけり／しりに立ちて追ひ行けど／いたづらになりにけり
一二一	よしや草ばの女	伊	伊	伊	伊	伊	ある御達の局の前を
一二三	(大納言登のむすめ てうのまへ)	○	○	○	○	○	津の国、菟原の郡／ゐな人
一二九	御はふりみる女	○	?	○	○	○	御葬見むとて、女車にあひ乗りて
一二四	(仲平のむすめ 業平の養いもうと)	○	○	○	○	○	さかしらする親
一二四	あてなるおとこもたる女	○	○	○	○	○	女はらから／ひとりとはあてなる男持たりけり
一二四	馬のはなむけにかはらけとる女	○	?	○	○	○	家刀自／女の装束かづけむとす
一二五	あだくらへする女	小	伊	伊	小	小	恨むる人を恨みて／あだくらべかたみにしける男女
一二六	(二条の後)	○	四	二	○	○	おのおの親ありければ／宮仕へ
一二七	(のぼるのむすめ うつく)	○	○	○	○	○	津の国、菟原の郡、蘆屋の里／女方より／ゐな人
一二五	(二条のきさき)	伊	内	?	○	○	女の仕るを
一二八	(つくり女 妹なし 哥は貫之也)	小	小	○	小	小	女、人の心を恨みて／かはづのあまた鳴く田

一二六	(万葉) (注11)	四	二	二	四	〇	陸奥／京に、思ふ人に
一一九	(?)	二	〇	二	二	内	あだなる男の形見
一二三	(いもうと也)	二	〇	五	二	二	深草に住みける女／やうやう飽き方に／行かむと思ふ心なくなりにけり

冷泉家流古注の系統にはかなりの揺れがある。今、宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』によって冷泉家流古注を代表させ、『知類集』と共通して有常の娘を当てる章段をあげると、第一・十・十七・十九・二十・二十四・三十九・四十一・四十四段の合計九章段ということになる。

こうした注は、『古今集』七八四・七八五番歌の紀有常の娘と業平の贈答歌を出典とする第十九段の女を有常の娘だと解したところから始まったものだろう。『古今集』によると夫婦関係にあった二人だが、『伊勢物語』第十九段では男も女も「宮仕へ」をしていること、二人の仲は「ほどもなく離れ」てしまっていること、女は「また男ある人」、つまり他に通う男のあることが分かる。

この「宮仕へ」が一つのキーワードになっている。右に示した九章段中、第二十・二十四段の二章段が「宮仕へ」の語を含む。「また男ある人」についても、第二十四段の三年帰って来なかった男を待ちわびて別の男と逢おうとした女の話と重ねて解釈される。第二十四段の「待つ」に関しては、久しぶりに桜の盛りにやって来た男に対し、あるじが「あだなりと名にこそ

立てれ桜花年にまれなる人も待ちけり」と詠む第十七段も通じるものがある。また、業平と継続して夫婦関係にあったのが有常の娘だとすれば、第一段、初冠後の初めての恋の相手を有常の娘とするのもうなずける。

『伊勢物語』と『源氏物語』から女性を十二人ずつ選び、つがえてその優劣を競う『伊勢源氏十二番女合』（注12）と題する写本がある。『伊勢』が左方、『源氏』が右方、勝負は『伊勢』三勝で『源氏』五勝、四持である。これの第三番は、『源氏』の紫の上に対して『伊勢』は「有常女君」であり、右方の紫の上の勝となっている。たとえばどのような女性が出たとしても、『源氏物語』における最大のヒロイン、紫の上に負けるのは当然という感じもするが、紫の上と合わされているのは、当時、この「有常女君」が業平の正妻だと思われていたことによるのであろう。

考えてみれば、『伊勢』第一段を踏まえている若紫巻で『源氏』に登場するのが紫の上なのである。『伊勢』第一段の垣間見される女はらからに当てられる有常の娘が紫の上と合わされるのは、当然と言えば当然のことであつたのだ。

昔男と女が女車に相乗りし、内親王の葬儀を見物に行く第三十九段は、光源氏が紫の上を連れて葵祭に出かけた葵巻を念頭に置き、有常の娘としたように思われる。

また、「家刀自」つまり主婦、とある第四十四段は、それだけでも有常の娘が当てられたであろうが、錢別に女の装束を贈る点において、有常が実名で登場する第十六段との類似を思わせる。

さらには、第一段は「奈良の京、春日の里」が舞台なので、第二十段の「大和にある女」と通じ、「女はらから」が登場する点で第四十一段も有常の娘姉妹の話になる。その第四十一段の「女はらから」は、「ひとりはいやしき男の貧しき、ひとりあてなる男」を夫に持っていた。『知頭集』も冷泉家流古注も「あてなる男」の方を業平とする。『伊勢物語』で高貴な出自の男と言えは当然業平なのだが、第十段の武蔵の国まで惑い歩いた男も「あてなる人」という設定であった。

ところで、第十段の「武蔵の国」という地名は、古注では武蔵野イコール春日野と解釈したり、登場人物が武蔵守であることの寓喩と読んだりすることで説明する。東下りを否定する古注では、第十二段の歌の初句「武蔵野は」が「古今集」では「春日野は」となっていることを根拠として、そのように解釈しているのである。

四

前章同様、宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』によって冷泉家流古注を代表させると、『和歌知頭集』のみが有常の娘のことだとする章段は、第十八・二十一・二十二・三十一・五十段であり、冷泉家流古注のみが有常の娘を当てるのは第二十三・三十三・四十・八十六・八十七段となる。

『知頭集』と冷泉家流古注の違いの一つは、『知頭集』が業平とは関係がなくて「とをきむかしの事也」（書陵部本）とする第二十三段を、冷泉家流古注では業平と有常の娘のこととする点である。初冠後の初めての恋の相手を有常の娘と考える第一段と、幼なじみの淡い恋が実る第二十三段を結び付けるのは理解しやすいであろう。第一段と第二十三段は、大和が舞台の話である点も共通している。第二十三段で男が妻の浮気を疑うのも、『古今集』の歌を使った『伊勢』第十九段で「また男ある人」と言われているのと通じる。また、親が結婚に反対したり女の親がはかなくなったという記述も、親が登場する他の章段、第十段「父はこと人にはあはせむといひけるを」や第四十段「さかしらする親」、第八十六段「おのおの親ありければ」に敷衍されている。第八十六段と八十七段は先に見たキーワードの「宮仕へ」を含んでもいる。

それから、第三十三段と第八十七段は「津の国、菟原の郡」が舞台であり、書陵部蔵『伊勢物語抄』では有常の妻の所領であったものを彼女の出家後に娘が譲り受けたと説明している。

の染殿内侍は第九十四段と共通する「秋の夜」の語から来ていると思われる。第三十一段の「御達」は冷泉家流古注では伊勢

また、**「知野集」**では第一段の「おひつきていひやりける」の「おひつきて」を「すぐに」の意ではなくて、文字通り「追いついて」と解釈している。有常の娘が業平に追いつき、融の歌を拝借して返歌した、と業平との恋に対する彼女の積極的な

姿勢を読み取っているのである。

ただし、「伊勢物がたりに、いろこのみとは、たしかにかきさだめたるおんなは、みな、をのゝこまちがこと也」(島原本第二十五段)と記すように、本文に「色好み」と明記されている女性(第二十五・二十八・三十七・四十二段)に関しては、『知頭集』もすべて小野小町を当てている。

『伊勢物語』の古注における小野小町については以前論じたことがあるが(注13)、小町説話の特徴の一つは男を捨てて出奔することであった。第二十一段は男女のどちらが家を出て行ったのか説が分かれるが、冷泉家流古注では女を小町とし、家を出て行ったのは彼女だと解釈している。現在の注釈書を見ると、出奔するのは冷泉家流古注と同様に女だとするものが大半である。

その第二十一段の女を、『知頭集』では有常の娘としている。では、『知頭集』は有常の娘が家を出ると見ているのかというと、答えは否である。『知頭集』の解釈では、家を出て行くのは業平の方なのである。『知頭集』の説を総合してみると、第二十四段で新枕することになっていた男は源至であり、女は「いたづらになりにけり」ということであるが、実際は死んでしまったわけではない。「春日の里にありし時、業平、三年来ざりしに、新枕して(至が)通ひはじめたりしかば」(書陵部本第二十段)とあり、その関係はしばらく続いていたが、有常の娘は業平とよりを戻した。しかし、彼女は至とは逢わないと

誓いながらも、業平が垣間見すると至の以前書いたものを広げて眺めていた。それで、業平は家を出て行った、ということである。

けれど、それぞれが他の人との恋をし、お互いに恨みながらも縁は切れなかったらしく、書陵部本の総論部分には「この女は、心つきぐさにして、あだをなす時もありしかど、恩をそむくれないければ、廿余年かれはてざりし女也」とある。長年連れ添った唯一の女性ということで、やはり有常の娘こそが業平の正妻であるとするのであろう。

五

『尊卑分脈』上では「女子」としてしか伝わらない紀有常の娘であるが、彼女の名を「阿子(あこ)」だとする説をしはしば見ることができる。

相しるとは、有常が娘を阿子とて染殿后御内に行て仕るを、業平、彼女に忍び／＼通ひけるをいふなり。

(宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』第十九段)
きのあこ、きのありつねのむすめ。

(『伊勢物語難義注』)(注14)
中には、「阿子」以外の有常の娘の名を記す古注もある。
女ハラカラト云ハ少納言大輔紀有常娘姉妹ナリ 姉ヲ

ハ阿房妹ヲハ王子ト云ナリ

（廣應義塾図書館蔵『伊勢物語註』第一段）
わかき女は、紀有常四女潔子なり。

（彰考館文庫蔵『伊勢物語抄』第八十六段）（注15）

心謬、こゝろあやまり、賀陽親王にさぶらひける有常が養子花子にあひそめてよみてやりける也。（同第百三段）

これらはすべて、『和歌知頭集』の次の文章からの派生であると考えられる。

ごたちとは、いたういやしくもなく、たかくもなき、わか女どもの事也。あこたちなどいふがごとし。

（書陵部本『知頭集』第十九段）

『知頭集』では「御達」の説明に「吾子（あこ）」、つまり、我が子同然に慈しんでいる人を親しんで言う「吾子」を用いているのだが、冷泉家流古注などに女の名前の「阿子」と勘違いされてしまったのであろう。有常の娘は姉妹で登場することもあるがそれがエスカレートし、「阿子」だけではない他の名が作られていったのだと思われる。実際、「阿子」以外の名を載せるものを除けば、「阿子」に触れる章段は皆第十九段であり、すべては『知頭集』の影響であることがうかがえるのである。

おわりに

夢幻能の傑作とされる謡曲『井筒』は、『伊勢物語』古注との関連で論じられることが恐らくは最も多い作品である。謡曲

の研究者の立場から、有常の娘の人物造形が『伊勢物語』古注に比べて美化されているとの指摘がある（注16）。実際、本稿で見てきたように、古注の中でも『知頭集』と冷泉家流古注を比べると、冷泉家流古注の有常の娘の方が色好みの面が薄れていることが確認できるのである。これは、『井筒』から旧注の有常の娘を貞女とする読み方（注17）へ続く一連の流れとも矛盾しない。

有常の娘像の変貌の原因としては、武士の価値観中心への社会構造の移り変わりもあろうし（注18）、『井筒』の作者である世阿弥の描きたかった有常の娘像という面も大きいだろう。

そして何より、色好みの典型としての業平像・小町像が固まっていくなつて、彼の恋人たちのそれぞれの持ち場が明確になっていったことがある。妻が夫に負けないくらいの色好みという有常の娘像は消え去り、彼女にはステレオタイプの妻の姿が押し付けられてしまう。浮気な恋人は小野小町だけで十分、なのである。

有常の娘に割り当てられた役割は、『井筒』でシテが名乗る「人待つ女」という呼称に象徴的に表されている。『伊勢物語』第二十三段の女は、『大和物語』第百四十九段の女とは違い、我が胸で燃える嫉妬の炎を金鏡の水で鎮めたりはしない。人々はその異伝は知りつつ、有常の娘には、業平の浮気に黙って耐え、結局はその忍耐と思いやりによって夫を取り戻したという良妻・貞女のイメージを求めているのではないだろうか。

(注)

- 1 『古今和歌集』本文は、『新編国歌大観』第一巻(角川書店、昭和38年)による。
- 2 奥村恒哉『古今和歌集』(新潮日本古典集成、新潮社、昭和33年)。
- 3 小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』(新編日本古典文学全集、小学館、平成6年)。
- 4 片桐洋一『古今和歌集全評釈』(講談社、平成10年)。
- 5 小島憲之・新井栄蔵『古今和歌集』(新日本古典文学大系、岩波書店、平成元年)。
- 6 『類註密勘』本文は、日本古典文学影印叢刊二十二『類註密勘』(日本古典文学会、昭和62年)による。
- 7 『伊勢物語』本文は、学習院大学蔵『伊勢物語』(鈴木知太郎『天福本伊勢物語』武蔵野書院、昭和38年/小林茂美『伊勢物語』影印校注古典叢書六、新典社、昭和50年)により、適宜表記等を改めた。
- 8 『尊卑分脈』(新訂増補国史大系、吉川弘文館、昭和33年)。
- 9 宮内庁書陵部蔵『和歌知類集』(片桐洋一『伊勢物語の研究(資料篇)』)明治書院、昭和44年)巻第六の「物語牛女共事」により、紀有常の娘が当てられている場合は、章段ごとに記される「女」の呼称を載せる。紀有常の娘以外の女が当てられる章段と誰も当てられていない章段は、括弧内に記述内容をそのまま載せる。
- 10 冷泉家流古注六本の内訳とその略号については、以下のとおり。
書：宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』(『伊勢物語の研究(資料篇)』)。
慶：慶応義塾大学図書館蔵『定家流伊勢物語註』(慶応義塾大学国文学研究会『平安文学 研究と資料』国文学論叢第三輯、至文堂、昭和34年)。
- 注：神宮文庫蔵『伊勢物語注本』(廣岡義隆・山口悦子・木戸久二子「翻刻『伊勢物語注本』(上)・(中)・(下)」『三重大学日本語学文学』第三・四・五号、平成4・5・6年5月)。
- 十：鉄心斎文庫蔵『十卷本伊勢物語註』(片桐洋一『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第一巻、八木書店、昭和63年)。
- 増：鉄心斎文庫蔵『増纂伊勢物語抄』(『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第一巻)。
- 奥：鉄心斎文庫蔵『伊勢物語奥秘書』(『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第二巻、八木書店、平成元年)。
- 11 業平自身が『万葉集』の歌を用いて創作したと見ている。
- 12 『伊勢源氏十二番女合』(『伊勢物語の研究(資料篇)』)。
- 13 拙稿『伊勢物語の古注における小野小町』(『中古文学論攷』第十一号、平成2年12月)。
- 14 『伊勢物語難義注』(『伊勢物語の研究(資料篇)』)。
- 15 彰考館文庫蔵『伊勢物語抄』(『伊勢物語の研究(資料篇)』)。
- 16 西村聡「人待つ女」の「今」と「昔」——能「井筒」論(『皇学館大学紀要』第十八輯、昭和35年1月)、飯塚恵理人「伊勢物語古注釈と「井筒」——有常娘像の変貌」(『椋山女学園大学研究論集』第二十三号第二部、平成4年2月)。
- 17 『伊勢物語宗長聞書』(『伊勢物語の研究(資料篇)』)(第二十三段に、「女はありつねがむすめなり。貞女なるゆへに名をあらはす也」とある。
- 18 青木賜鶴子「室町後期伊勢物語注釈の方法——宗祇・三条西家流を中心に」(『中古文学』第三十四号、昭和59年10月)。